

佐藤春夫的日語論 —兼論新舊假名漢字論爭—

邱若山

靜宜大學日本語文學系教授

摘要

佐藤春夫是日本近代文學家當中，對日語的關心度最高的作家之一。佐藤春夫對日語文的關心，不是始於戰後，是從戰前，而且是從昭和初期就已呈現這樣的態度。

佐藤春夫的日本語論，概括日語的表記、文章表現、語彙、文法、語用、文學創作、日語之美等等日語相關的全面性課題。不過，基本上，是日語舊假名以及漢字擁護論。佐藤過世之後，金田一春彥在其著作『新日本語論 私の現代語教室』，以佐藤春夫的一篇論文「小説—国語の醇化美化」為攻擊的焦點，展開他的日語相關的論述。

本論文試圖將佐藤春夫有關日語論述的文章、發言、評論，做分期且有系統的整理，並闡明其與新舊假名、漢字存廢論爭的關聯。

關鍵字：佐藤春夫、日本語論、新旧假名漢字論爭、金田一春彥

福田恆存

受理日期：2018.03.10

通過日期：2018.05.11

**Haruo Sato's Theory of Japanese:
The new and old kana and kanji controversies**

Chiou, Ruoh-Shan

Professor, Providence University, Taiwan

Abstract

Haruo Sato is a modern literary writer who had a strong interest in Japanese.

His attitude of Japanese attention was not after the war, before the war, it was also from the beginning of the Showa era. Haruo Sato's Japanese theory has been discussed throughout Japanese language issues such as Japanese notation, expression, vocabulary, grammar, words, literature creation, Japanese beauty etc. Basically he was the defender of the old kana and old kanji.

Since Sato passed away, Haruhiko Kindaichi raised Haruo Sato 's Japanese theory "Novel - Beautifying the language of the national language" as a spearball in "New Japanese Theory of My Modern Language Classroom". I will examine the words, sentences and comments about Japanese, arguments and classify it according to the time period of Haruo Sato. Also, I will investigate how it relates to the new and old kana and kanji controversies.

Key words: Haruo Sato, theory of Japanese, Haruhiko Kindaichi,
The new and old kana and kanji controversies,
Tsuneari. Fukuda

佐藤春夫の日本語論 —新旧仮名漢字論争に関わって—

邱若山

静宜大学日本語文学科教授

要旨

佐藤春夫は近代の文学者の中で、特に日本語について強い関心を持っていた作家の一人である。その日本語関心の姿勢は戦後になってからのことではなくて、戦前、それも昭和初年からそうであった。

その佐藤春夫の日本語論は、日本語の表記、表現、語彙、文法、語用、文学創作、日本語の美など、日本語全般の問題にわたって論じたものであるが、基本的には旧仮名、漢字擁護論であった。佐藤が亡くなってから、金田一春彦は『新日本語論 私の現代語教室』で、かつての佐藤春夫の日本語論の一篇、「小説—国語の醇化美化」を槍玉に挙げた。

佐藤春夫の言葉、日本語についての文章や発言、議論を調べ、それを時期区分して整理し、また、それがどのように新旧かなと漢字の論争と関わったかを本稿で究明する。

キーワード：佐藤春夫、日本語論争、金田一春彦、
新旧仮名漢字論争、福田恆存

佐藤春夫の日本語論 —新旧仮名漢字論争に関わって—

邱若山

静宜大学日本語文学科教授

1. はじめに

佐藤春夫は近代の文学者の中で、特に日本語について強い関心を持っていた作家の一人である。その日本語関心の姿勢は戦後になってからのことではなくて、戦前、それも昭和初年からそうであった。

佐藤春夫の日本語論は、日本語の表記、表現、語彙、文法、語用、文学創作、日本語の美など、日本語全般の問題にわたって論じたものであるが、基本的には旧仮名、漢字擁護論であった。

佐藤が亡くなってから、金田一春彦は『新日本語論 私の現代語教室』（筑摩書房、昭和41年2月）で、戦前、佐藤春夫が書いた日本語論の一つ、「小説一國語の醇化美化」を槍玉に挙げた。

戦前から日本語の表記法の改訂が提起され、終戦後翌年の1946年末より新仮名使い、当用漢字が全面的使用になった。しかし、新仮名当用漢字の使用が全面的に実施された後も、新旧かな、漢字使用をめぐる論争は、長く続けられていた。表記法の問題だけでなく、日本語の本質、日本語の美しさの追求の議論が絡んでいた。

日本語の表記法の議論と関わりながら、日本語の美、日本語の品格を追求し、展開された佐藤春夫の、言葉と日本語についての文章や発言、議論を調べ、それを時期区分して整理し、その日本語論の真意を確かめ、また、それがどのように新旧かな・漢字の論争と関わったかという、佐藤春夫の日本語に対する姿勢を、本稿で究明したいのである。

2. 金田一春彦『新日本語論』から

金田一春彦は『新日本語論 私の現代語教室』（筑摩書房、昭和41

年 2 月) の第一篇「これまでの日本語は乱れていた」の第五章「終戦前の日本語の乱れ」の「今の日本語は気に入らない」という小節で、

昭和十年代は「国語の醇化」「国語の愛護」ということが強く叫ばれた時代であったが、それと対比して、日本語の混乱ということが、さかんに問題となったものであった。(p59)¹

と言って、「日本語の乱れ」を論じた代表的な文献として、山田孝雄『国語尊重の根本義』、藤村作『国語問題と英語科問題』、松尾捨治郎『国語と日本精神』を指摘し、各氏の「日本語の乱れ」論を分析、整理し、その内訳を究明すると同時に論駁を加えた。続いて同章の「絶えない国語をうれえる声」(p65)の小節で、昭和 16-17 年 の間に朝日新聞社が出版した六巻のシリーズ『国語文化講座』を取上げ、このシリーズの「日本語の乱れ」を説くことの急であることに触れながら、シリーズ第五巻『国語生活篇』における井上司郎「国語と国民思想」、長谷川如是閑「国語と社会生活」、菅井準一「科学・技術用語」、柳八重「婦人の言葉」、沖野岩三郎「言葉の作法」、杉村楚人冠「新聞用語」などの所論するところの当時の日本語の問題や、不統一、混乱の現象を整理した上で、シリーズ第一巻『国語問題篇』に収録されている「標準語と方言」で作者柳田國男が指摘した問題にも言及した。(p65-68)。それから、その次節の「強烈な末世観」で、シリーズ第四巻『国語芸術篇』を取上げ、

ある著名な文学者の書いた「小説」という文章の一部分を紹介しよう。どういう人であるか想像しながら、読まれば、興味があろうと思うので、名前はしばらく伏せる。(p 71)

そして、終わりのところで「さて、だれだかわかりますか。実は、この人、姓は佐藤、名は春夫だというと、意外というほかないではないか！」(p 74) というふうに些かの風刺、皮肉を含めた軽佻な筆端で「小説」という作品とその作者の佐藤春夫を料理する。既に

¹ 以下、本稿では引用部分の後に、脇註 () の形で、該当引用資料の所在頁を示す。

亡くなった佐藤春夫は反論の仕様もないが、金田一春彦の「泣いて明治の文豪を斬る」(『文芸春秋』昭和40年4月号)の続編と考えてよかろう。金田一春彦が「日本語は乱れていない」(『文芸春秋』昭和39年12月号)主張を掲げるために、「日本語が乱れている」と見ていた作家を俎上に載せた論述の展開なのである。

「小説」²とい文章は、32折(小節)からなっている。金田一は、第二折(国語の純化と美化)、三折(国語と国文の乱脈)、七折(現代文の乱脈と品格の欠如は文法がない点に起因する)、八折(現代文の混乱、乱脈の弊害はとどまるところを知らない)、十五折(近來の国語の欠点は、敬語の不十分)、十七折(現代文の欠点の一つ、語尾の単調)、二十折(現代は紀貫之の出現を待っている)、二十五折(新造語よりも古語)、二十八折(漢字論者)、三十一折(校正者の教育と手段)³の文章を部分的に引用して、それに対して、「戦後の国語を嘆く言葉と同じようにひびく」、「今日あるを見越した人の言かと思う」、「谷崎潤一郎氏の『文章読本』を思わせる文章である」、「強烈な末法思想である」、「紀貫之を期待するのは、この人にとってすじがちがうのではないか」、「このへんは、言葉の乱れを口にす人のよく言うことだ」、「おやおや、これは漢字制限の論である。」と、揶揄、冷やかし交じりの論法で、

大体こんなことで終わる。というと、なんだ、これは漢字制限を考えていた人で、さては、現在では当用漢字・現代かなづかいを賛美して、改革を喜ばない他の作家連を笑っている作家だろうということになる。(p74)

と述べ、前述のような種明かしで佐藤春夫を斬るのであった。

続いて「乱れをさげぶ心理」(p74)の小節で

佐藤春夫氏は、戦後の国字改革には反対の旗頭で、戦後の国語の混乱を人一倍苦々しく思い、嘆いていた人だった。氏は変

² 佐藤春夫「小説」『国語文化講座 4 国語芸術篇』(朝日新聞16年8月)所収。のち、「国語の醇化美化」と改題した。『佐藤春夫全集』22巻(臨川書局)収録。

³ 原文には番号が振られているだけで、折(小節)は筆者が付けた名称で、後の()内の文字は筆者がその小節の要旨を整理したものである。

節したのか。(中略)

私はここに重要な事実がひそんでいると思う。(p 74)

と言い、金田一は「戦後国語を乱れたと言っている人は、戦前もやはり乱れたと言っていた人なのだ。山田孝雄氏然り、柳田国男氏然り、そして佐藤春夫氏然りである」(p 75) と加えて、

「言葉が乱れた」ということを、むやみに口にする人は、日常の言葉に関心の強い人であるが、同時にほこりの高い人、自信の強い人ほど、言葉の乱れということを口にしたがると言っている。(p 75)

とその心理を分析している。そして、「日本語の乱れを嘆く人々は、第一にいたずらに前の時代を慕う必要はない。前の時代に生まれたら、やはり嘆いていたに違いない。それから第二に、いたずら将来の日本語を心配する必要もない、ということである」(p 78) と論を総括する。「言葉の乱れはいつの世も」という結論である。

3. 佐藤春夫の日本語論に関する文章

前節で金田一が「佐藤春夫氏は、戦後の国字改革には反対の旗頭で、戦後の国語の混乱を人一倍苦々しく思い、嘆いていた人だった」と言っているが、佐藤春夫は確かに近代の文学者の中でも、特に日本語について強い関心を持っていた作家の一人である。その日本語関心の姿勢は戦後になってからのことではなくて、戦前、それも昭和初年からそうであった。佐藤春夫の言葉、日本語についての文章や発言を調べ、それを時期区分して整理すると、次のようなものがある。(○の数字は『佐藤春夫全集』⁴収録巻数)

【昭和初年代】

昭和 02 年 01 月「文学と言葉」②〇

昭和 02 年 04 月「言葉」『若草』②〇

⁴ 『定本佐藤春夫全集』36 巻、別巻 2. 臨川書局 1998-2002 年。巻数のついていない作品は未確認か、座談会での発言ゆえに、全集には収録されていないものである。

昭和 04 月 08 月 「詩の用語としての日本語の考察」『九州日報』
5 日 ㉔

昭和 06 年 08 月 「現代流行語に対する一考察」『春泥』 ㉔

昭和 06 年 08 月 「アッパッパ論（仮名遣改定問題）」（附 文部省
国語調査会の仮名遣 改正案）『都新聞』 21-25
日 ㉔

【昭和十年代前期】

昭和 10 年 04 月 「口語文章論」『中央公論』 ㉔

昭和 10 年 11 月 「句読点の問題」『国語特報』

昭和 11 年 06 月 「漢字奨励小論」『東京朝日新聞』 3 日 ㉔

昭和 11 年 07 月 「国語国字を語る」（座談会）『日本評論』

昭和 11 年 07 月 「漢字廃止論の是非」『大法輪』 ㉔

昭和 11 年 07 月 「漢字の事など」同窓会会誌 ㉔

昭和 11 年 10 月 「漢字廃止不可論」『日本評論』 ㉔

昭和 11 年 10 月 「日本語の美を」（『現代語訳国文学全集』内容
見本） ㉔

昭和 13 年 09 月 「漢字やふりがなをどうするか」『日本文学』 ㉔

【昭和十年代後期】

昭和 16 年 07 月 「日本語と日本文化」（座談会）『日本語』

昭和 16 年 08 月 「小説—国語の醇化美化」『国語文化講座 4』 ㉔

昭和 16 年 12 月 「日本語の美しさの根底」『日本語』 ㉔

昭和 17 年 03 月 「神としての言葉」『日本語』（巻頭語） ㉔

昭和 17 年 09 月 「美しきかな日本語」（日本文学報国会巡回講演）

昭和 17 年 10 月 「国語そのものに対する純粋な愛情を」『日本語』
（巻頭語） ㉔

昭和 18 年 03 月 「国語の反省」（座談会）『日本語』

昭和 18 年 08 月 「現代の語感」『日本語』 ㉔

昭和 19 年 07 月 「南方の日本語」『日本語』 ㉔

昭和 19 年 10 月 「南方を語る」『日本語』（座談会、釘本久春と
対談）

昭和 19 年 10 月「言葉の風味」『日本語』（巻頭語）②

【戦後：昭和二十年代初期、三十年代初期】

昭和 22 年 01 月「国語と国字との問題」『方寸』 ②

昭和 23 年 09 月「国語とその文化」『国鉄情報』 ②

昭和 29 年 04 月「現代国語批判」（座談会）『群像』

昭和 33 年 03 月「亡国語仮名づかひ（仮名遣い）」『群像』⑤

昭和 2 年より昭和 33 年にわたり、戦前戦後、実に 30 年間、20 篇を超える日本語、言葉、関係の所論をものした。一方、日本語についての座談会に五回⁵参加し、一回の巡廻講演にも参加した。

以下、佐藤春夫の各時期における日本語関係の主要論述の主な内容を整理する。

3.1 昭和初年代

この時期の主な佐藤春夫の論述は、「現代流行語に対する一考察」（②p240）と「アッパッパ論（仮名遣改定問題）」（②p241）である。

「現代流行語に対する一考察」では、先ず、

ダンゼン。ダンチ。ガゼン。先端。エロ。グロ。インチキ。ナンセンス。ダラ幹。リード。百パーセント。行進曲。モリモリ。ジャンジャン。ガツチリ。チャツカリ。猟奇。トテモ。泣ケタ。ナンバーワン。テンポ。スピード。オーケー。モチ。ロボツト。マネキン。赤。清算。アゲル。デモ。レポ。彼氏。小田急。オンパレード。イツト。シツク。ウルトラ。美給。バーバル。トツプ。モノスゴイ。意味シン。漫談。超。オステーキ。チャンバラ。裸像。（②p240）

などの昭和初年代の流行語を挙げて、「殆んど一つの例外もなく趣味の悪いものばかりで必ず識者を颯感せしめることと思ふ」と指摘し

⁵ 座談会の題目から見て、昭和 19 年 10 月「南方を語る」『日本語』（座談会、釘本久春と対談）の座談は日本語についてではないが、当時の文部省国語課長釘本久春との対談で、日本語についての話題が中心になり、また『日本語』での掲載なので、加算して五回という計算になる。。

ながら、「単なる排斥するばかりでなく、一応考察して見る価値もあらうかと思ふ」(②p240) と言って、考察を行ったのである。「日本一」、「ダラ幹」、「円タク」、「ダンゼン」、「ガゼン」、「ガツチリ」、「スゴイ」、「美給」が流行り、流行語に「雑音仄音拗音語」⁶の沢山あることを伝統に対する反逆を意味すると指摘する。また、自分が造語した「獵奇」が「本来の意義から離れて流行語になり下品なものとして通用している」ことに嫌な気持ちがすることに言及している。

「アッパッパ論」(附 文部省国語調査会の仮名遣改正案)は「一 清涼服とかや」「二 アッパッパ愛用の心事を推察す」「三 讚美すべき哉アッパッパ」「四 国語調査会とアッパッパ」の四節から構成している。当時流行する都会の清涼服アッパッパ姿を借りて、「アッパッパの愛用家たる彼女等は、もともと美的価値の問題ではない。便利でさへあれば、これが醜悪であらうと滑稽であらうと一切問題ではない。」(②p243) とその心理を指摘して、「古来のよき伝統を勇敢に一蹴し去つて学的根拠も論理的一貫をも省みず便利のためと称して仮名遣の改正を断行せんとする文部省の心理と態度とは、正にアッパッパ愛用家とその軌を一にするものと称すべき」(②p244)として、「この仮名遣改正に根拠を与へたる責任当事者たる文部省国語調査会委員の夫人及びに令嬢達は、必ずや郎君及び父君の意を体して、日常アッパッパを愛用せらるるに相違あるまじきを僕は茲に信念を以て推定する者である」(②p244) と皮肉をこめて批判している。

3.2 昭和十年代前期

昭和十年代初期の重要な論述は、「口語文章論」(②p46) と「漢字奨励小論」(②p202) を始めとする一連の漢字に関する議論である。

「口語文章論」は「一 緒論、ごまめの歯ぎしり」、「二 挿話「浮世形六枚屏風」澳訳者の序」、「三 句読点の問題」、「四 日本文法及び言文一致など」、「五 喋るやうに書く説——わが新言文一致の論」か

⁶ 濁音、促音、拗音を指して言う。後の文章で同じような観察を示している。

ら構成されている。

「緒論」では、谷崎潤一郎の『文章読本』の主張——国文国語の伝統を尊重すること、含蓄の美を力説することに同感を示す一方、その不足を指摘する。「国語混乱」の原因を「明治時代の無反省に有頂天な文物一切の舶来崇拜」にして、「国語教育」に対して、授業の時間が少ないこと、教科書は現代文が中心であることに不満と憂慮を述べる。「挿話」では、キプリングの「東は東、西は西」に触れ、訳者の苦心談から、日本語におけるテニヲハ、数、性、人称、時の問題、主格の省略、関係代名詞、句点の欠如などの特色に言及して、それを、「これも亦日本文日本語の特色で美点だと僕は考へてゐる。」

(②p68)と言っている。それから、現代文の句読点の問題、文法の問題、また自分の文章法「喋るやうに書く」説を開陳する。

昭和十年代前半における佐藤春夫の日本語についての議論のもう一つの焦点は「漢字奨励小論」を始めとする一連の漢字観である。

「漢字奨励小論」は「漢字は決して中華民国の文字ではない。立派に現代日本の文字である」、「この文字を考へずに我国の文明を考へることは誰しも不可能であらう」、「漢字を更に研究し、發達させることこそ、日本が世界文明に負うている一使命である。この文字の持つ文明と西欧文明とのいみじき結合が新日本の新文明になる」(②p202)と強く主張する。「漢字廃止不可論」(②p255)は最初から、

本文の目的とするところは本誌前号の平生文相の漢字廃止説の読後感を述べて、この無視することの出来ない一文に対する反響を示し、併せて自分の聊か抱懐する国語及び国字に対する管見一斑を世に問はんとするのである。(②p256)

と宣言している。当時の文相平生鈇三郎⁷の漢字廃止論に対する真正面からの攻撃の議論である。平生が主張する漢字廃止が平時の愛国運動であるという結論は、単純、通俗、平俗なものとして、

⁷ 平生鈇三郎、当時の文相、今の甲南大学の創設者。

平生氏の論は頭から尻尾まで便利重宝といふ一点を根幹にしている論にしかすぎない。(中略)

さうして便利と重宝—能率の増進と経費の節減は決して文明の全面容ではない筈である。能率と経費との問題で一切が解決すると思ふのは驚くべきアメリカニズムである。さうして文相の論は正にアメリカニズムより観たる漢字論である。(②p256)と批判を加えた。「国語を軽視して児童の頭脳の負担の軽減を国字の改良によつてのみ企てなければならない理由はない」(②p257)と指摘し、文部大臣平生氏の心理現象を分析してその名前「平生鈞三郎」から漢字嫌厭になり、漢字有害論を展開したろうと齒向かった。さらに平生論文の文句「能率の増進」「経費の節減」は「はかがゆく」「むだのはぶける」にすべきと皮肉った。漢字は「諸外国の象形文字より」「そのかがやかしい過去を持つこの文字の芸術と亦わが国に於ての伝統とのために自分は漢字を愛用し愛読してゐる者である」(②p258)と唱え、「漢字は無理に記憶を強要する以外に、工夫によつてはもつと根本的に合理的な教育方法があ」ることを述べ、「かながき文で東洋思想を理解することは不可能」(②p259)だと主張を開陳している。

3.3 昭和十年代後期

「日本語と日本文化」(座談会、昭和16年7月)⁸では、「日本語の進出と日本文化」を談話の主軸にしている。佐藤春夫は「品格のある日本語」をあくまでも主張し、日本語の中国進出に、日本語の品性を保つことのできないのを憂慮した。⁹伝統のある日本語(敬語など)の乱れが気になっていた。「ありがとうございます」が「ありがとうございました」の形で使われていることに品格の低下を憂う。

⁸座談会での発言で、『定本佐藤春全集』には収録されていない。

⁹この座談会では佐藤春夫の談話主張によって、最終の議論の方向性が中国においての「日本事情」「日本文化」の伝播にもっていかれたことを、松永典子は『「総力戦」下の人材育成と日本語教育』(2008年、花書院)の第3章「文化政策としての日本語教育」で論じている。

「言葉に生活の地盤を持たなければ意味はない」と言明し、「文化語」は「生活語」であるべきで、殖民地などで「日本語を教えるといふより」「日本語を生活させる」と見方を示した。台湾旅行で見た日本語教育の現場の言語体験を、先生が悪い、と言った。「文化語と生活語とを一緒に生活に即して教へることに優れた小説を読ませることが一番」適当だという見方を示した。「漢文訓読体は日本人が独創したもので、日本文の一体と考へられる」と主張した上で、「大陸と国内と問題はいつも一つとなる」としながら、日本人の外来文化を消化する力を力説し、文化の独立性を強調する。この座談会の発言の内容は、つまり、本稿で最初に取上げた、金田一春彦が槍玉にあげた「小説—国語の醇化美化」のベースとなったのである。

「日本語の美しさの根底」(②p188)で「日本語はたいへんわがままな奔放不羈な句法を採つてゐる」、「いつも省略を約束として飛躍の多いところに」「美しい特長がある」(②p189)、「語る者と聴く者との協和によつてはじめて成立する言葉である」(②p189)、「抒情精神のために、形容詞や副詞を補ひ用ゐる」(②p190)、「素朴でありながら、音色が豊富」(②p190)、「強引に説得するような性格はない」(②p190)、「(物語、連歌連句は)日本語のつくつた世界独特な文学様式」というふうになら「日本語美しさの根底」を語っている。

「国語そのものに対する純粋な愛情を」(②p211)では、「国語国字の改良論には二重の大きな間違いがある」と指摘し、「表面はともかくも内心国語を憎悪し少なくとも軽侮していたらしい国語改良案に対しては自分は根本的に不賛成である」と立場を明示した上で、「改良論者」に「国語そのものに対する純粋な愛情を」持つことを説諭し、その引退を待つと強く言う。

「国語の反省」(昭和18年3月)では、「方言は直らない(方言が悪いといふ観念がない)」こと、「形容詞+です」は書生言葉からで問題を持っていること、省略の多い日本語の文章は「情緒」を重んずることを論じている。

「現代の語感」(②p255)では、生田長江の言を引いて、現代の日

本語の文章は翻訳ないし誤訳から出発していると説き始め、鈴木三重吉の文体は日本在来の談話体に接近した句法である、現代の人は語意を知っているか知っていないかを気にしていて、語感つまり「言葉の色、にほひ、かをり、ひびき、かげり」を気にしないことに問題がある、詩人は語感を常に問題にする、「時代の語感の喪失は国語教育の不足に基づくものであらう」、「母国語の語感をさへ知らずにどうして外国語の語感に気づくだらうか。現代人が語に意のあることを知り、感のあることを忘却する道理である。語感の喪失は国語破壊と重大な関係がある」(②p257)、と語感の論を展開する。

そして、自然主義文学運動と左翼文学活動が「国語」の美質、情趣を破壊した、宣伝文も語感破壊の一つの元凶だと糾弾する。「美しく正しい言葉を年少の国民たちに多く聞かせ読ませることが語感の洗練には第一に有効」(②p258) だとして、詩情の富んでいる韻文、「感情のしづかに充実した正直に直截簡明な言葉」(②p258) を勧める。

戦争末期の「南方の日本語」(②p281) などの文章では、特にインドネシア、ジャワに於ける日本語の進出と日本語教育の展開を非常に楽観視していた。「言葉の風味」(②p296) では、1944年9月5日の朝、台湾の学生の面会要求を受け、

その父が編輯主任をしてゐる「台湾芸術」に談話をほしいといふから三十分ばかり問答して記事を書かせる事にする。台湾の文学を振興させる根本策はといふ問に対して、国語の実用的普及はもう十分と思はれる今日、更に一步を進めてその品格と風趣とを悟らせ味はせて国語に対する愛情を喚起させる教育であらう。(②p296)

と答えたことから、持論を展開したのである。

昭和16年「日本語と日本文化」の座談会以来、雑誌『日本語』と深い関係を持っていて、佐藤春夫の日本語関係の所論は殆んど『日本語』への執筆であった。

3.4 戦後昭和 20 年代初期、30 年代初期

戦後間もなくの「国語と国字との問題」(②p56)で、「国語と国字」の改良がアメリカの占領政策の一環として、促されたことを「国語の運命」として嘆いた。

台湾や朝鮮で、以前我々が土地の人々から訴へ聞かされたところを今はわが身の上と思い出しはするものの、そんな無用の心配におびえる必要はあるまい。(②p56)

とって、「国語の問題」を「国体の問題」とした。「自分の言葉の問題ぐらゐは、いかに敗戦国民とても自分で考へて見るだけの苦勞をしてよからう。否、敗戦国民なればこそ身にふりかかつたさまざま苦勞を悉く身にしみて考えるべきであらう」(②p57)と云って、「新しい国語は国民の新しい生活のハツラツたる限り自づと誕生するであらう。」(②p58)、そして、「新生活を促進するための新しい国語の創造をも急がなければならない」(②p58)として、「問題を新しい国語の創造の急務といふ一点にだけ局限してみるとすればこれは文学者の仕事に属すると思ふ」(②p58)と、戦後の新時代における文学者の責務を開陳する。「簡素で明確に品格のある言葉を創造」(②p58)することを期待している。更に、「国語審議会の与へる方針はいつも便利第一主義の通俗なもので国語の愛から出たと思はれるところのすくないのは困つたものである」(②p58)と、相変わらず国語審議会の対立面に立って、厳しく批判している。そして、「文学者が第一に喜んで使ひたくなるやうな国字改革でなくてはたとひ閣議が承認しようとも有害無用のものではあるまいか」(②p59)と結論付けた。

続いて「国語とその文化」(昭和 23 年 09 月)(②p79)で、

曾て台湾の本島人が謂ふところの国語教育(日本語の日常化を強要して彼等の言葉を圧迫する事)に就て我々に告げ口し、また朝鮮の詩人たちが日本語の半島に於ける重圧のために、彼等の国語が失はれんとしつつある事実を愁訴した時自分は心中に万腔の同情を禁じ得なかつた所以である。我々の為政者が国語

の尊重を知らなかつた結果は、それとも気づかないでかういふ残虐を行つてゐたのを今改めて反省してみるべきであらう。(㊸ p79)

と更に戦前殖民地における、日本殖民地政府の言語政策の暴行に対する反省をしている。そして、

国語の無視され軽蔑されてゐるこの環境のなかですぐれた文学も偉大な文学者も産れ出ないのは無理もない話である。(㊸ p79)と、戦後間もなくの日本のために悲しむ。昭和 29 年 4 月に佐藤春夫は「現代国語批判」の座談会(『群像』昭和 29 年 04 月)に参加した。この座談会では、「新仮名制定のいきさつ」、「出席者の仮名づかい」、「新仮名賛否と批判」、「役人の態度に対して」、「造語力、正字法」、「現代の新かなをいかにするか」、「国語改革の歴史」、「流行語について」、「新仮名使用の現実」、「標準語と東京語」などの課題で、意見が交わされた。佐藤春夫がかつて、日本語について、議論したことのある議題であった。此の座談会の中島健蔵の司会で、佐藤春夫の他に、武田泰淳、三島由紀夫、釘本久春が参加した。竹内栄美子は「中野重治と佐藤春夫」¹⁰で、

この座談会では、新仮名使用中野と旧仮名使用の春夫とは表面的には対極に位置するよう見えて、文部省の国語政策や役人の公文書文体などに対する批判的見解は一致して面白。言葉の発生につながる語源的なものを重視したり生活のなかの言葉を生かすという立場も二人は同様で、中野の発言に対して春夫は「それは名論です」「だから中野君のいう生活に即した言葉というのをこの際大いに鼓吹すべきですね」などと語った。と、座談会の様子を評している。

佐藤春夫の最後の日本語についての発言は昭和 33 年の「亡国仮名づかひ」(㊸ p287)であった。ここで、新仮名を「亡国語仮名づかひと呼ぼうと思ふ」という決心を示した。

¹⁰ 竹内栄美子「中野重治と佐藤春夫」『定本佐藤春夫全集第 17 巻』月報 31。(2000. 10)。

便利一辺倒の民衆向と称するアメリカニズムの新仮名の採用によつて敗戦の実績を全うしたので、はじめは軍人の功を求めたことに起こり終は文官のそれである。文武合同の完全敗北戦である。(㊦p287)

と憤慨する。「僕は不賛成のため今まで新仮名といふものは使はなかつた」、そして、自分の原稿の植字の出版社による書き直しについて、「語意が通じさえすればよい実用文の場合はともかく語感を大切にしなければ成立しない文学の場合、僕はどこまでも新仮名には同意できない。」(㊦p287)としている。

戦前、戦後を通して、佐藤春夫の日本語に対する見解と態度、立場は非常に一致している。日本語の乱れ状況を憂い、日本語に対する愛、日本語の美と品格を追求、強調し続けた。日本語(「国語」)に対する思考と意見の発表を通して、佐藤春夫は遺憾なくその国士振りを具現していた。

4. 国語学者と文学者の間の国語／日本語論争

前に触れたように、金田一が「佐藤春夫氏は、戦後の国字改革には反対の旗頭で、戦後の国語の混乱を人一倍苦々しく思い、嘆いていた人だった」と決めつけているが、戦後における日本語の「国字改革」に反対行動をもっとも堅持した文学者は、福田恆存であった。福田恆存は「現代かなづかひ」、「当用漢字」、「常用漢字」の議題で、国語審議会、特にその主要メンバーである金田一京助、続いて、金田一春彦と日本語表記をめぐる大論争を起こし、戦い続けた。その名著『私の国語教室』¹¹は次のような章節から構成されている。

第一章「現代かなづかひ」の不合理。第二章 歴史的かなづかひの原理。第三章 歴史的かなづかひの習得法。第四章 国語音韻の変化。第五章 国語音韻の特質。第六章 国語問題の背景(一、

¹¹ 『私の国語教室』新潮社、昭和 33 年。増補版、昭和 38 年。新潮文庫、昭和 36 年。増補文庫版(中公文庫)昭和 58 年。本書は全書旧仮名旧漢字表記であるが、本稿での引用は当用漢字にした。

混乱の責任 二、混乱の効果 三、官民呼応作戦 四、表音化の理由 五、漢字の存在理由 六、誤れる文化観 七、誤れる教育観 八、文字言語と音声言語 九、誤れる言語観 十、不可能な表音文字化)。増補篇(「国語問題早解り」「陪審員に訴ふ」「言葉と文字」「日本語は病んでいないか」「後書きに藉りて改めて論ず」「中公文庫版あとがきに藉りて常用漢字を論ずる」)

福田は「序」で

「現代かなづかい」や「当用漢字」を制定した国語改良論者たちは、日頃、文学者を目の敵にして、その反対論の基調をなす「文学主義」ないしは「唯美主義」を攻撃し、大衆を味方に「実用主義」の宣伝に努めてをりますが、これは一種の詐術であります。あるいは彼等の保身術に過ぎません。私自身、戦後の国語改良に反対するのは、それが「反文学的」であるからではなく、「非語学的」からです。

私は昭和三十年、三十一年に、金田一京助博士との論争の形式において、「現在かなづかい」と「当用漢字」の非なることを述べました。

私は国語改良論者は狂信的であるといふ海音寺潮五郎氏の言葉に同感です。

と書いている。戦後における福田恆存の「現代かなづかひ」と「当用漢字」についての戦闘は昭和 50 年代まで続いた。¹²同じ「現代かなづかひ」と「当用漢字」反対論陣営にあって、佐藤春夫の日本語観及び議論が福田恆存の議論とどのように交差、連動し、相互の援護射撃があったかどうかについての論究は、本稿では考察する余裕はないが、更なる追究を将来に期したい。

5. 終わりに

戦後、昭和 21 年末から新仮名、当用漢字が全面的使用になり、日

¹²「中公文庫版あとがきに藉りて常用漢字を論ずる」(昭和 58 年)を最後にする。

本語表記法の変更をめぐる論争で、文学者の中でそれに反対する人が多かった。佐藤春夫は旧仮名使用、漢字擁護の立場を取りつづけた。日本語、日本語表記等についての議論は前述通り、「亡国仮名づかひ」が最後のものではあったが、実際、春夫逝去後、遺稿「現代日本を歌ふ」¹³が発見された。この詩の最後は、

テレビジョンやラジオや
アンテナ林なして家々に行きわたりぬ
一億総白痴化は言はじ
もと賢明なるにあらねば
「着ものは着れる、物は見れる、彼女は来れる
わりかしイカシハッスル」とやら
卑俗なる国語の普及に日も夜も足らず
蓋し文部省の亡国語教育に協力するか
その美化と純化とは忘れられ
国語をだに満足に語り得ざるは
げに奇怪無比の文化国なるかな。 (②p265)

で結び、その日本語観を堅持し、文部省の新仮名漢字政策を批判し続けていた。作詩の時間は確かではないが、1964年東京オリンピック大会で斉唱された「オリンピック東京大会賛歌」と同じ作者佐藤春夫の遺作なのであった。

新旧仮名漢字論争の末の一つの解決策、或は妥協策と言った方がいいかもしれないが、戦前の初出或は作家の主張を尊重し、戦後の作家全集類は、旧仮名、当用漢字表記で出版されることになっている¹⁴。旧仮名は歴史的仮名遣いとして、現代の日本語においては読解の記号として残り、書写の記号でなくなった。生涯、旧仮名の使用を堅持する作家として、佐藤春夫の国士振りを高く評価し¹⁵、春

¹³ 「現代日本を歌ふ」『読売新聞夕刊』昭和39年5月8日。『定本佐藤春夫全集』第二巻（臨川書局2000年4月）収録

¹⁴ この点について、2016年11月26日台湾日本語教育学会国際シンポジウムにおける口頭発表の際、白百合女子大学高橋博史先生よりご教示を頂いた。

¹⁵ 阿川弘之『国を思うて何が悪い—自由主義者の憤慨録』光文社文庫1997年11月。新装版2008年4月。

夫の精神血族とも言える阿川弘之が最後であったろう。

日本語の表記の上で旧仮名旧漢字の時代は過ぎ去ったが、それに関わって論じられてきた、「日本語の醇化と美化」、日本語の美しさの追求という佐藤春夫の主張は、いつの時代になっても、日本語を使う日本人の永遠の課題だと思われる。

テキスト：

『定本 佐藤春夫全集』臨川書局 1998-2002。

(第 2、20～35 巻を主に使用した)。

主要参考文献：(出版時間順)

「国語国字を語る」(座談会)『日本評論』昭和 11 年 07 月

「日本語と日本文化」(座談会)『日本語』昭和 16 年 07 月

「国語の反省」(座談会)『日本語』昭和 18 年 03 月

「南方を語る」(座談会)『日本語』昭和 19 年 10 月

「現代国語批判」(座談会)『群像』昭和 29 年 04 月

柳田國男『国語の将来』創元社 昭和 28 年 9 月

金田一春彦『新日本語論 私の現代語教室』筑摩書房昭和 41 年 2 月

福田恆存『増補版 私の国語教室』中公文庫昭和 58 年 2 月

阿川弘之『国を思うて何が悪い—自由主義者の憤慨録』光文社文庫
1997 年 11 月。新装版 2008 年 4 月。

竹内栄美子「中野重治と佐藤春夫」『定本佐藤春夫全集第 17 巻』月
報 31. (2000. 10)。

松永典子『「総力戦」下の人材育成と日本語教育』花書院、2008 年。

付記:本稿は 2016 年 11 月 26 日に台湾日本語教育学会国際シンポジ
ウムでの口頭発表予稿を再構成、加筆修正したものである。